

購読者に電子メールで送信したものをそのまま掲載しています。等幅フォントでお読みください。

---

< C U E > 利用教育委員会通信 第 66 号 (18 巻 2 号) 2007. 9. 11 発行

---

■■■■ ■ ■■■■ 利 用 教 育 委 員 会 通 信  
■ ■ ■■■ 日 本 図 書 館 協 会 図 書 館 利 用 教 育 委 員 会  
■■■■ ■■■■ ■■■■ JLA The Committee of User Education

---

- ・ 「< C U E > 利用教育委員会通信」は、日本図書館協会図書館利用教育委員会の最新のニュースをお伝えするメールマガジンです。
- ・ < C U E > とは、Committee of User Education の頭文字です。英語の「cue」はスタートの合図の意。利用教育の普及への願いを込めた誌名です。
- ・ 利用教育関連の情報をお寄せください。
- ・ メールマガジンに関するご意見、ご要望はこちらへ。cue@jla.or.jp

---

□ 目次

- (1) 第 93 回全国図書館大会 東京大会 (第 21 分科会) のお知らせ
- (2) 第 10 回図書館利用教育実践セミナーの報告
- (3) エッセイ
- (4) 文献紹介
- (5) 編集後記
- (6) 利用教育委員会委員

- 
- (1) 第 93 回全国図書館大会 東京大会 (第 21 分科会) のお知らせ

● 2007 年 10 月 30 日 (火) 9:30-16:30

みんなで創ろう図書館利用教育！：実践アイデア交流広場

1. 概要

近年、多くの図書館で利用教育の実践が行なわれています。しかし、各図書館では図書館利用教育の実施にあたり、内容や方法、さらには、どのようなプログラムを実施するのが課題になってきています。本分科会では、積極的に図書館利用教育を実施している複数の図書館のプロ

グラムを具体的に報告していただき、発表者と参加者の情報交換を行なうための交流広場をつくり、図書館利用教育実践のさらなる創造をめざしていきます。

- 会 場：国立オリンピック記念青少年総合センターセンター棟 102 室  
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号  
(小田急線参宮橋駅下車 徒歩 7 分, 又は東京メトロ千代田線代々木公園駅下車 4 番出口より徒歩 10 分)  
<http://nyc.niye.go.jp/facilities/d6-1.html>
- 対象者：図書館職員, 教職員, JLA 会員, 図書館関係団体, 他
- 主 催：日本図書館協会
- 企 画：図書館利用教育委員会 (<http://www.jla.or.jp/cue/>)
- 申 込：本分科会は、全国図書館大会の分科会の一つであるため、全国図書館大会の参加費 7,000 円が必要となります。申込方法の詳細については『図書館雑誌』2007 年 6 月号または下記のページをご覧ください。  
[http://www.nittsu-ryoko.com/travel/event/jlr\\_93/](http://www.nittsu-ryoko.com/travel/event/jlr_93/)

## 2. プログラム

本分科会は、ポスターセッション (9:30~12:30, 13:30~14:30) とパネルディスカッション (14:30~16:30) の二部構成になっています。

ポスターセッションでは、大学図書館、医学図書館、公共図書館、学校図書館、専門図書館での利用教育の実践例を展示し、気楽に発表者と情報交換ができる交流広場をつくります。それぞれの実践例の発表者と発表内容は下記のとおりです。

### <大学図書館の実践>

- ・「京都大学附属図書館の事例 (仮)」  
天野絵里子氏 (京都大学附属図書館)
  
- ・「東北大学附属図書館の事例 (仮)」  
渡邊愛子氏 (東北大学附属図書館)  
藤澤こず江氏 (東北大学附属図書館)
  
- ・「Web チュートリアル (KITIE) の実践」

市古みどり氏（慶應義塾大学信濃町メディアセンター）  
上岡真紀子氏（慶應義塾大学理工学メディアセンター）

#### <医学図書館の実践>

- ・「聖路加看護大学図書館の事例：『図書館利用教育ガイドラインー大学図書館版ー』10項目による評価の試み」  
松本直子氏（聖路加看護大学図書館）

#### <公共図書館の実践>

- ・「神奈川県立川崎図書館の事例（仮）」  
森谷芳浩氏（神奈川県立川崎図書館）

#### <学校図書館の実践>

- ・「LibraryNAVI（ライブラリー・ナビ）の実践」  
松田ユリ子氏（神奈川県立相原高校）  
宮永敏明氏（神奈川県立小田原城東高校）

#### <専門図書館の実践>

- ・「メキシコ・グラスゴーの事例（仮）」  
青木玲子氏（埼玉県男女共同参画推進センター）

このほか、図書館利用教育委員会の歴史に関する展示も行います。具体的には、『利用教育委員会通信』の復刻版の展示、全国図書館大会における当委員会の歩みの展示、『図書館利用教育ハンドブック』や『情報の達人』など当委員会が制作した資料、図書、映像教材の展示を行う予定です。

パネルディスカッションでは、パネラーやコーディネーターとともに自由討論を行い、図書館利用教育の実践のコツやノウハウを共有します。パネラーには、ポスターセッションの発表者の天野氏、渡邊氏、市古氏、森谷氏、松田氏を予定しています。コーディネーターは、丸本郁子氏（大阪女学院短期大学名誉教授、元図書館利用教育委員会委員）です。

分科会終了後には懇親会（18:00～20:00）を行う予定です。ポスターセッション・講師の方と交流ができます。ただし、定員がありますのでご注意ください。会場、会費、申込方法は下記のとおりです。

会場：ワイズ エステック情報ビル店（新宿駅西口徒歩5分）

<http://r.gnavi.co.jp/p184300/>

会費：5,000円

申込：電子メールで下記の内容を日本図書館協会事務局まで。

送信先：cue@jla.or.jp

●申込書

-----  
《全国図書館大会（第21分科会）》懇親会参加申込書

[2007年10月30日（火）]

■申込日：

■氏名（氏名ヨミ）：

■JLA会員／非会員（会員の場合は会員番号：\_\_\_\_\_）

■所属：

■住所：

■電話番号：

■電子メール：

-----  
※記入いただいた情報は、今回の研修の企画・運営の参考にするほか、  
今後、研修等の情報をお送りする場合などを除き、利用、公表する  
ことはありません。

本分科会に関心を持つ多くの皆様の参加をお待ちしております。

=====

(2) 第10回図書館利用教育実践セミナーの報告

司書が備えるべき情報評価能力について講演

—つっこみ力で情報読解を！—

春田和男（筑波大学大学院生）

日本図書館協会（企画・運営：図書館利用教育委員会）は、7月13日（金）、同協会研修室で、第10回図書館利用教育実践セミナーを開催しました。今回は、有吉末充氏（京都学園大学）を講師に迎え、「情報を批判的に読み解くには—司書に求められる情報評価能力を考える—」と

いうテーマで講演が行われました。

講演では、当委員会刊行の『図書館利用教育ガイドライン』の概要を紹介したのち、テレビ、インターネット情報源、サブカルチャー、芸術作品、新聞、書籍等のメディアの批判的な検討を行い、司書が備えるべき情報評価能力について指摘されました。メディアの批判的検討では、事実と意見を区別する習慣が必要であると述べられました。また、司書が備えるべき情報評価能力としては、スキル、批判力、コミュニケーション、コラボレーションを挙げられました。このうち、批判力に関しては「なんでやねん」「ほんまかいな」といった「つつこみ力」をまず身につけることが提案されました。講演後には、質疑応答が活発に行われました。

このセミナーには、各館種の図書館員を中心に49名が参加しました。アンケートでは、セミナーの印象が「大変良い」という回答が45.7%、「大体良い」という回答が48.6%で、良いという評価が94.3%に上りました。セミナーの感想には「様々な事例が紹介され、面白かった」「つつこみ力の大切さを知ることができた」「自分自身のスキルアップに役立った」などが寄せられました。

---

### (3) エッセイ

飛行機野郎のリテラシー：「情報の達人」ライト兄弟

有吉末充（京都学園大学）

人類が初めて空を飛んだのは今からほぼ100年前の1903年のことで、初飛行に成功したのがウィルバーとオーヴィルのライト兄弟であったことはよく知られている。

ところで、このライト兄弟が「情報の達人」であったことは意外と知られていない。今回はそこにスポットをあてて、何がライト兄弟の初飛行を成功に導いたのかを見ていくことにしよう。

ライト兄弟が空を飛ぶ機械（飛行機）の開発を考え始めたのは、1898年ごろのことだった。この時点で、すでにヨーロッパではリリエンター

ルがグライダーでの滑空に成功し、羽ばたかない翼でも（それまでは鳥のように羽ばたく翼を作ることが模索されていた）人間を乗せて空を飛行できる可能性が示されていたし、それに先立つ1871年にはアルフォンス・ペノーがゴム動力でプロペラをつけた模型飛行機を飛ばすことに成功していた。さらに欧米では蒸気エンジンもガソリンエンジンを実用化されていたので、これらを組み合わせてリリエントールの翼に、エンジンとプロペラをつければ有人飛行が可能な飛行機が作れるのではないかと誰もが考えるのは当然のことで、フランスのクレマン・アデル、アメリカではサミュエル・ラングレーらが軍や政府から莫大な資金援助を受けて飛行機の開発に着手していた。ライト兄弟は、高名な学者ではない無名の町の自転車屋で、公的な資金援助を受けていたわけでもないので、かなり不利な立場からのスタートだったわけである。

さて、このライト兄弟が飛行機を開発するにあたって、まずやったことは何かというとそれまでの飛行に関する知識を徹底的にさらってみることであった。彼らは町の図書館に行って、飛行に関する本を読みあさった。つまり基礎的な文献調査を行ったわけである。すべての本を読み終えた兄弟は、さらに新しい情報を求めて1899年5月30日にスミソニアン協会に手紙を書いている。「私は人類の飛行は可能であると固く信じており、これについて系統だった勉強がしたいのです・・・」<sup>1)</sup>。当時スミソニアン協会の副理事長は先に述べたラングレーだった。

ラングレーにしてみれば将来のライバルから援助を求められたわけだが、圧倒的に有利な立場にいたラングレーはまさかこの若者たちが飛行機の開発に成功するとは思わなかったのだろう。先達としての余裕を見せて、こころよく最新の文献をライト兄弟に提供している。その文献とは、『飛行機器の進歩』（シャヌート）、『空気力学の実験』（ラングレー）『飛行の問題』（リリエントール）などだったが、ライト兄弟は他にもペノーの文献なども手に入れて目を通している。さらに、文献のひとつの著者であり飛行理論の研究者であるオクターブ・シャヌートに会ってその助言も求めている。

こうして手に入れた文献を検討した結果、ライト兄弟が気づいたのは、これまでの飛行機開発においてまだ誰も飛行中の姿勢制御のシステムを作り出していないことだった。有人飛行実験のパイオニアであったリリエントールは1896年8月の滑空実験中にグライダーが墜落して死亡して

いるが、その原因が姿勢制御の失敗であったにもかかわらずである。この時点で兄弟は、有人飛行を行うためには飛行中の姿勢制御を行うシステムを開発することが不可欠だと確信したのである。このように情報を分析して解決すべき課題を明確にしえたことが成功への第一歩であった。

兄弟は文献のデータに基づいてグライダー模型を作り飛行実験を開始したが、なぜかうまくいかない。度重なる失敗に兄弟は文献のデータに疑いを抱くようになり、そして検討の結果リリエントールが遺したデータに誤りがあることを発見する。もう先人のデータに頼っていたのでは実験は先に進まない。そこで兄弟は風洞を自作して翼の形状に関するデータを集め始めた。風洞を使って翼の実験を行うのは今日では当たり前のことだが、これを始めたのもライト兄弟が初めてだった。

こうして飛行に最適な翼の形状がつきとめられ、ライト兄弟のグライダーによる飛行実験は順調に進んでいく。

この過程で、ライト兄弟は左右の翼の揚力に差をつけることで機体の傾きをコントロールするしくみを開発した。この原理は今日の飛行機とほぼ同じもので、飛行中に突風に見舞われてもすばやく姿勢を立て直すことができるし、しかもこのしくみを使って機体を傾かせた状態で舵を切ると、飛行機は円弧を描きながら旋回して進行方向を変えることができるのだった。つまり飛行機を操縦することが可能になったのである。当時飛行機を開発していた者で、飛行機の向きを変える方法を開発したのは兄弟の他に誰もいない。彼らが作ろうとしていた飛行機はただ前へ前へとしか進めないのである。向きを変えようとしたらいったん着陸して地上で向きを変える必要があった。

さらに兄弟は軽量でかつ十分な馬力をもったガソリンエンジンや効率のよいプロペラの開発にも成功している（ここでも風洞が有効に活用された）。理想的な形状の翼を持ち、姿勢制御のシステムを備えた機体に、これらのエンジンとプロペラを取り付けた。

こうして完成したライト・フライヤー1号機は飛行実験の場所であるキティホークの丘に運ばれ、1903年12月17日、人類初の有人飛行に成功したのであった。

この時のパイロットはオーヴィルだったが、これはくじで搭乗する順番を決めたのだという。この9日前の12月8日、かつてライト兄弟に資料を提供したラングレーは飛行機械「エアロ・ドローム」による有人飛行実験を行ったが、機体はまったく飛行せず完全な失敗に終わっている。

このようにライト兄弟の初飛行までの道のりは、基礎文献調査→さらに詳細な文献を求めての探索→先行研究の問題点の発見→データの検討と誤りの発見→実験によるデータの収集と検証という、何かを開発するときの王道とも言うべき手順を踏んで行われたことが分かる。ライト兄弟のライバルはたくさんが、彼らのほとんどが直感で機体をデザインしていた。遙かに不利な条件からスタートしたはずのライト兄弟が初飛行の偉業を成し遂げたのはいわば必然だったと言える。情報を活用する力は夢を実現する力でもあるのである。

#### 引用文献

- 1) 根本智『パイオニア飛行機ものがたり』旺文社（テクノライフ選書）、1996, p. 75

#### 参考文献

- 1) 『ライト兄弟一世紀：人類の有人動力飛行始まりの記録』デルタ出版（ミリタリーエアクラフト3月号別冊）、1999
- 2) 野口常夫『飛ぶ：人はなぜ空にあこがれるのか』講談社、1991
- 3) 『カラー版徹底図解 飛行機のしくみ』新星出版社、2006

---

#### (4) 文献紹介

図書館を広く考え、創造的に活用していくための二冊

戸田光昭（駿河台大学名誉教授）

1. 『つくる図書館をつくる—伊東豊雄と多摩美術大学の実験』鈴木明、港千尋、多摩美術大学図書館ブックプロジェクト編、2007年7月、鹿島出版会、190p. 2,500円（税別）

これは図書館の本であるが、建築関係の本でもある。鹿島出版会が発行所であるために、建築本として書店で扱われて、芸術や建築の棚に配置されている場合も多い。書店は発行所で本の内容を判断するからであ

る。

しかし、図書館関係者からみれば、完全に図書館の本である。このような多様な観点から図書館を取り上げた本がこれからも、多数出版されれば、日本の図書館界はさらに活発化するであろう。

この本は建築書らしく、その半分近くが写真と図版で構成されており、眺めているだけでも楽しくなる。楽しむために読むこともできる。それだけでも高価なこの本を購入する価値はある。しかし、関係者としては、それだけでは済まない。重厚な内容をすこしずつでも解読したいものである。重厚と言ったが、難解という意味ではない。関係者には容易に理解できる内容である。そして、現場を見学して確認すれば、さらに理解が深まるであろう。

目次から気になる項目のいくつかを列挙しておく。

<図書館の創造的な利用法—コミュニケーションとブラウジングのためのインタラクティブデザイン>

<図書館「しつらえとふるまい」の考古学>

<ラボラトリー><カフェ><インフォシェルフ><ラウンジ><マグテーブル><メディアバー><メディアシート>

<アーケードギャラリー—現代のライブな文化や芸術のブラウジングルーム>

<創造的図書館利用のてびき—空間・施設・設備・家具デザインのコンセプト>

2. 『コミュニティの活力源になるライブラリーをめざして—自分の力を生かして、マネジメント—：ライブラリーマネジメント・ゼミナール講義ノート』丸本郁子監修，人と情報を結ぶWEプロデュース LMゼミプロジェクト 編，2007年6月 人と情報を結ぶWEプロデュース，115p. 1,000円

図書館は立派で役に立つ活動や事業を行って来たのに、ほとんど社会的には評価されなかった時代が、日本においては長く続いてきた。誰にでも利用可能な施設であり、機能も備えているのに、その価値を知る一部の人たちの為だけに存在しているというのが実体であった。それは、様々な社会的・政治的背景があったからであろうが、図書館員養成のカリキュラム（制度としては、公共図書館員養成の司書講習科目）にも欠陥があった。1996年の図書館法施行規則改正で「図書館経営論」という科目が入れられ、マネジメントの重要性が教育科目にも明示された。これでようやく一人前の社会的施設として歩き始めることになったのである。しかし、現場に実績が乏しいため、急速に図書館が発展することは難しい。

そのような状況の中で、この講義ノートに掲載されているプログラムは、現職の専門職の人たちにとっては、実践的で即効性のある内容になっている。ここに収録されているは、2006年9月から2007年1月にかけて関西で実施されたものであるが、参加できなかった人にとっても、ゼミナールに参加したのに近い効果があがるように編集されていて、「“マネジメント”の視点やスキルを身につけて、元気でポジティブに、そして戦略的に図書館活動を展開していけるように、共に学びあう場として、人と情報を結ぶWEプロデュースが提供しているプログラム」に講義ノート上で参加できるのである。

ゼミナール第1回は、ジュンク堂書店の福嶋聡さん、第2・3回はWEプロデュース代表の尼川洋子さん、第4回は元日本生命附属文研図書館の高橋和子さん、第5回はインフォメーションプランニング代表の結城美恵子さんであり、ファシリテーター（本書では監修者となっている）を大阪女学院短期大学名誉教授の丸本郁子さんが務めている。

各回の本書における構成内容は、(1)レジュメ、(2)レクチャー、(3)ワークショップの説明、(4)ワークシート、(5)ワークシート記入事例（参加者の事例まとめ）となっており、講義ノートを使って実践的に学べる。

なお、この本は、日本図書館協会の出版物販売の窓口（電話：03-3523-0812、FAX：03-3523-0842、電子メール：hanbai@jla.or.jp）でも取り扱っているので、誰でも購入することができる。

---

---

(5) 編集後記

第 66 号をお届けします。今号では、全国図書館大会東京大会の第 21 分科会のお知らせを掲載しました。関心のある方はぜひご参加ください。皆様のご参加を心よりお待ちしております。 (春田)

---

---

(6) 利用教育委員会委員

(委員長)

青木 玲子 : 埼玉県男女共同参画推進センター

(委員)

赤瀬 美穂 : 京都産業大学図書館

有吉 末充 : 京都学園大学人間文化学部メディア文化学科

石川 敬史 : 工学院大学図書館

木下 みゆき : 大阪府立女性総合センター情報ライブラリー

戸田 光昭 : 駿河台大学名誉教授

野末 俊比古 : 青山学院大学文学部

春田 和男 : 筑波大学大学院博士課程

和田 佳代子 : 昭和大学歯科病院図書室

久保木いづみ : 日本図書館協会事務局

---

< C U E > 利用教育委員会通信 第 66 号 (18 卷 2 号) 2007. 9. 11 発行

・バックナンバー

<http://www.jla.or.jp/cue/>

・配信登録・変更・解除・お問い合わせ

[cue@jla.or.jp](mailto:cue@jla.or.jp)

※本紙は Yahoo! Groups を使って発行していますが、日本図書館協会および当委員会、ならびに本紙の内容と Yahoo! とは関係がありません。

---

---

[戻る](#)